

去年われは新しき友一人得て「貝紫」とうむらさき
知りたり
木多川夏

新しい友が未知の色彩をもたらしてくれたいという。こ
ういう幸せを幸せと感じとる心がすばらしい。「貝紫」
は帝王紫とも呼ばれる高貴な紫色。紀元前にフェニキア
人が小さな貝の内臓で布を染め、その色を出したという。
雨の日の記憶に浸して染め上げたTシャツを着てあ
らわれる君
佐佐木定綱

一緒に過ごしたあの雨の日と同じTシャツを着て来た、
意味だけをとればそんな意味だろう。「記憶に浸して染
め上げた」という言い回しがポイント。

ガラス越しにロシアンブルーを見る我と目が合うべ
ットショップの店員
海老原愛

予想外の展開、意思とは別の場に連れ出されたときま
どい、そんな折の微妙な心の揺れを表現して楽しい。猫を
見ていたつもりが、じつは人に見られていたのだった。
数秒の時間をドラマティックにクローズアップした手腕。

地のひびき天のひびきを巻き起こし冬を極めてゆく
岩手山
山口明子

規模が大きすぎて吹雪を短歌にするのはむづかしいの
だが、岩手山という固有名詞を出して成功。

「どこへ行くん？」
台所より妻の声なにゆえ我は跳び
上がるのか
武富純一

ユーモアの歌だが、ユーモアのほかにひょうきんな味
わいが出ていて独特である。直接話法の部分のリアル。
おほいなる読経美しましひの伸びあがりゆくやう

短歌の現在

No.409

今月の15首を読む

佐佐木幸綱

な体感

山本枝里子

高野山の歌のなかの一首。大勢の僧が声を合わせて唱
える読経。その僧たちの読経の声のうねりを、文字通り
身体的にうけとめた感覚をうたっている。下句、うまい。
吾の中の小人が体をかけめぐる夢をみながら眠る風
邪の日
和田理恵

風邪で高熱がでてしまった一日。時間の感覚もなく、
ただうとうとしながら過ごす時間。そんなとらえどころ
のない時間を、すつと言葉ですくい上げてみせた。

口もどが別れし夫に似てゐると告げてみさむ小さ
き口を
服部崇

バツイチの女性との会話の場面だが、具体的に表現さ
れているので、映画の一場面を見るように、鮮明に場面
を思い浮かべることができる。ストーリーを抱き込んだ
歌として、インパクトのある作にしあがっている。

押し黙り人々は待つ
来るバスを唯一神のやうに信
じて
大塚泰子

雪の降る中で、十分、十五分と待ちつづけている場面。
ひねりのきいた下句、位置を得ている。ただ、視点はど
こにあるのか。作者は「人々」のなかの一人なのか。

トラックの荷台に門松運ばれてクリスマススの日の夜
は更けゆく
大津貴寛

クリスマススの夜らしくない光景をことさらにクローズ
アップして、日常性に光を当てた。もう少し描写が細部
にわたると、より日常性が強く出たはず。

白紙を折りゆくごとく式すすみ神官が打つしのびて俣手ふた